

サンプル

あの日交わした、子供の頃の約束――。ねえ、キルアレス。貴方は今でも、ちゃんと覚えているのかな……？

時計の針を、七年前へと巻き戻してみる。

当時の私は十歳。由緒正しい公爵家の令嬢でありながら、極度の人見知りでおどおどしてばかりの、ちょっと冴えない女の子だった。幸運だったのは、私の父と国王陛下が親友同士だったこと。そのおかげで、私は当たり前のように王城へ出入りし、第二王子である彼と幼馴染として育つことができた。

カメラのレンズを覗き込むように、あの日の王宮の庭園を思い出してみる。

さんさんと降り注ぐ木漏れ日の中、小気味いい金属音が響いていた。

そこにいたのは、十三歳のキルアレス。

細められた赤い瞳。顎のラインでサラサラと揺れる、眩しいほどの金髪。まだ少年特有のしなやかさを残す身体つきなのに、大人の騎士を相手に一步も引かないその剣技は、すでに天才の片鱗を覗かせていた。一流の剣士としてのきらめきが、幼い私の目を釘付けにする。

パシッと小気味いい音を立てて木剣が弾かれ、手合わせが終わる。私に気づいたキルアレスが、ふっと視線を和らげて歩み寄ってきた。緊張のあまり、おろおろとドレスの裾を握りしめる私を見て、彼は意地悪そうに、でも愛おしそうに口元を綻ばせる。

「アリア、相変わらずおどおどして……危ないからもつと下がつて見てろって言っただろ？」

「だって……キルアレスの剣、すごく格好いいから、近くで見たくて……」

俯きながら消え入るような声で答えると、キルアレスの赤い瞳が、一瞬で熱を帯びたのがわかった。いつもは俺様で生意気な幼馴染なのに、この日の彼は、なんだか驚くほど優しくて甘い。

キルアレスは私の手首をそっと掴むと、そのまま誰もいない大きな木陰へと引っ張っていった。距離が近すぎて、ドクドクと心臓の音がうるさい。

「なあ、アリア。お前が十七歳になったら、俺は二十歳だ」

「うん、そうだね……？急にどうしたの？」

「どうしたのも何も……」

キルアレスはわたしの頬に冷たい指先を滑らせ、じっと視線を絡めてくる。その赤い瞳の奥にある独占欲の深さに、十歳の私はまだ気づいていなかった。

「お前さ、自分の可愛さ、全然わかってないだろ。……その笑った顔、俺以外の男に見せたら絶対に許さないから」

「え……？ええっ!？」

急な言葉に頭の回転が追いつかなくて、私の思考はパニックを起こす。おどおどと視線を彷徨わせる私を逃がさないように、キルアレスの切れ長な目が細められた。

「お前が十七になったら、結婚できる年齢だ。十七になったら、俺と結婚しろ」

「……え、でも、まだ学生だし……っ」

「そんなの、関係ない。いいから、俺の言う通りに『うん』って言え」

有無を言わせない俺様で傲慢な響き。だけど、そこには私を誰にも渡したくないという、一途で痛いほどの情熱が詰まっていた。

「……う、うん……っ」

小さな声で頷いた瞬間、キルアレスは満足そうに口元を歪め、私の小さな身体をぎゅっと力強く抱きしめた。そして、誓いを刻み込むように、わたしの額にそっと唇を落とす。

「約束だからな。……アリア、お前が好きだ。俺の姫はお前だけだ」

背中に回された手に、ギュッと強い力がこもる。腰が砕けそうになるくらいの緊張と、目眩がするほどの甘い幸福感。恥ずかしくて顔が爆発しそうだったけれど、私も、キルアレスのことが世界で一番好きだった。

そして——運命の齒車が狂い始める——

七年後——国王生誕祭の夜会が始まる

今日。この後行われる夜会に、公爵家が……あいつが、出席する。

絶望を堪えるような彼の表情が愛おしくて、私は見つめ返した。キルアレスは私の頬を愛おしそうに両手で包み込み、引き寄せて優しく唇を重ねてきた。

「……あの時よりも、もう大人だな。……もっといいか？」

「……ええ。もっと、貴方を感じたい……」

「……っ、愛してる」

今度は、拒む隙もないほど深い口づけが降ってきた。熱

い舌が不意に滑り込んできて、私の思考は完全に溶けていく。

「……ん……っん……っ……」

「もっと、お前を俺のもので満たしたい……可愛いな、アリア」

キルアレスの唇が私の首筋へと滑り降り、甘く肌をなぞっていく。同時に、彼の指先がドレスの胸元へと忍び込み、乳首をくるくると弄りはじめた。じわじわと身体の奥が熱くなっていく。

「……あっ……こんなの初めて……っ。ここでは、ダメ……誰か来ちゃう……っ！」

「……アリアに触れたい。もう我慢できないんだ」

「はぁ……はぁ……っ」

彼の吐息が耳元を掠め、唇はさらに下へと這っていく。

「キルアレスっ……んんっ、や……っ、あん……」

「……こんなに感じてる……」

容赦なく、だけど愛おしそうに弄られ、頭の芯が痺れていく。キルアレスの指先が薄い下着をそとずらし、奥へとゆっくりと滑り込んできた。未体験の刺激に腰がびくんと跳ね上がり、私はすぐのように彼の背中にしがみついた。

「……あっ……っ……こんなの、変になっちゃう……っ」

「アリア……最高に可愛いよ」

内側を愛撫されるたび、クチュクチュと小さな水音が静かなバルコニーに響く。キルアレスは私の声を塞ぐように再び深くキスを交わしながら、指先で優しく円を描くようにそこを追いつめていく。

くちゅくちゅ

「……ダメ……くる、変になる……っ、ダメえええ……キルア……っ！」

指先にきゅっと力がこもった瞬間、頭の中が真っ白になり、私の腰が大きく跳ね上がった。全身の力が抜けて彼の胸に寄りかかった。

キルアレスは激しく波打つ私の背中を優しくキスをしたあとに耳元でふっと妖艶に微笑んだ。

「……続きは、また会った時にお預けだ」

第四話——「——ここから先は、本編のチラ見せサンプルです——」

夜中の十一時。

天蓋ベッドに横たわっていると、コンコン、と窓を叩く小さな音が響いた。

カーテンを開けると、そこにいたのはキルアレス。なんと彼は、私の部屋の窓の外に浮いていた。

「……びつくりした……。窓から来るなんて思わないじゃない」

「お前に会いたくなった。だから来た。それ以外に理由がいるのか？」

ここは三階なのに、平然と浮いているのが凄い。私は慌てて鍵を開けて、彼を室内に招き入れた。

「ふふ……可愛い顔してる。この肉棒で、奥の奥まで犯されて、俺の形に染め上げられるんだ。もう二度と、俺以外のことなんて考えられないように……」

「……キルアレス……っ、優しく……挿れて……」

アリアは涙目で懇願すると、恥ずかしさで真っ赤に染ま

った顔と、すでに愛液でぐしょぐしょに濡れた媚肉が、キルアレスをさらに狂わせた。

「……ああ、もちろんだよ。俺の可愛いアリア……俺だけの――ここに、たっぷり愛を注いでやる」

キルアレスは甘く微笑みながら、アリアの細い脚を大きくㄟ字に開かせ、熱く怒張した肉棒の先端を、アリアのヒクヒクと収縮する媚肉にぐっと押し当てる。

ぬるっ……ずぶっ、ずぶずぶずぶっ……！

「あっあん……っ……キルアレスのが……お腹まで来る……っ！」

「まだ半分だよ？ ほら……もっと腰を浮かせる。俺の全部、根元まで飲みこめ………アリアの可愛いナカに、俺の形を刻み込むんだ」

彼は低く艶やかな声で囁きながら、腰をゆっくり沈めていく。熱く脈打つ太い肉棒が、アリアの狭い膣壁を押し広げ、最奥の子宮口をずっと突き上げる。

「……あっ！ ああんっ……！奥……奥当たってる……っ！……すごい……熱い……！」

「いい子だ……全部入った。俺の肉棒で、子宮の入り口を塞がれているのがわかる？ ほら、締め付けて……俺を離さないように」

くちゅっ、ぐちゅぐちゅっ、じゅぷじゅぷっ……！

淫らで卑猥な水音が激しく響く中、キルアレスはゆっくり腰を振り始め、次第に勢いを増していく。アリアのクリトリスを親指で優しく擦りながら、子宮を直接突き上げるような深いストロークを繰り返す。

「……やっ……やっ……あっ……あん……ダメえ……そこばっかり……あんっ！ あっあっあんっ……！んん――

―あっ……おかしくなる……！」

「可愛い……本当に可愛いよ、アリア。俺の肉棒でイキ顔晒してる……その顔は反則だろう……」

キルアレスは甘く微笑みながらも、瞳の奥に狂気がチラリと覗く。彼はアリアの脚を高く持ち上げ、自分の肩に担ぎ、より深く、より激しく腰を打ち付ける。

ぱちゅん！ずんっ！ぱちゅん！

「……あああっ！　ダメ……また……いくっ……！　キル

アレス……っ！　お腹の中……あっあん……いく……！」

